

て失敗したり、職数はどんなにこなしたかわかりません。そのために年金は国民年金しかなく、今は仕事をしていますが、仕事がなくなったら生きられないと心配しながら七十七歳を迎えています。

今生きている

高知県 中平松鶴

黙(もだ) 深く墓地の下ゆく戦友も

このシベリアに死をおそるらし

零下四〇度に近いシベリアの冬、古ぼけた外套に身を包み、寒風に首を縮め、警備兵にせきたてられながら作業に駆り出された。その往復にはこの墓地の下を通った。この歌は同じ隊にいた鳳城さん(消息不明)の作。

月一回(二回ぐらいいったかもしれない)同好者による歌会での当選歌であるが、よほど感銘し

たものとみえて、満州ボケ、シベリアボケで記憶喪失症の私によく覚えていられたと我ながら感心している。

昭和二十(一九四五)年終戦直後の私たちの集結地は満州チチハル(原隊海拉爾)であった。チチハルはシベリア鉄道で内地送還というふれ込みで退院組の一個大隊が編成され、貨車(客車ではない)の人となったのは十一月。関東軍防疫給水部要員であった私たちは同年兵(二年兵になったばかり)十数人とともにこれに加わったわけである。隠していたつもりの腕時計が警備兵の目に触れ、略奪されたのもその車中での出来事。警備兵はセコンド万年筆を虎視たんたとねらっていた。両腕にいくつかの腕時計、バンドにはいくつかのセコンドをぶらさげ得意満面だった若い警備兵たちの姿が思い出される。

貨車は真ん中にストープを取りつけ二段に仕切ってあった。俘虜輸送用の改造車であろう。チチハルを東するか西するかが我々運命の分かれ目、と

車中は真剣そのものであった。汽車が東に折れるや車中はどよめきたち、私たちも手持ちの砂糖を集めぜんざいを作り、赤飯を炊きして、前途を祝福し合った。しかしその喜びは一夜のはかない夢となり、翌朝途中下車を命ぜられた。被服消毒を行おうという説明だったが、これより一年余りにわたる我々の俘虜生活が始まったわけである。スレテンスクというひそやかな炭鉱街で病院跡がそのまま収容所となった。シベリア鉄道が眼下にあり、毎日毎日食糧や満鉄のものであるう橋材等が原形のまま、あるいは分解されて積み込まれ、西へ西へと走り去るのを複雑な気持ちで見送った。

退院組の隊だったので、炭坑作業に出る者は一部であったが、それぞれれんが工場、道路作業、伐採、貨車の積みおろし、コルホーズ等々「働かざる者は食うべからず」で毎日のようにどこかへ駆り出された。精神的な打撃に加えて肉体の疲労、さらに食糧の悪さ、隊員は日を加えて衰弱していった。いつ帰れるか皆目分からない。長いこ

とはないだろうというのが皆の気持ちだった。

したがって、糧秣の計画的な消費はできなかったものと思われる（糧秣はすべて我々が満州を出るとき積み込んだもの）。まず白米を食った。次第に平麦とかわり、次にコウリヤンが主となり心細くなつたが、そのころはまだよかつた。来る日も来る日も大豆、小豆が出るようになって食物の不消化は下痢患者を増し、便所は大いににぎわつた。私自身、裏急後重（リキュウコウジュウ）という赤痢の症状を呈し、一日四十回近く便所に通つたこともあつた。室内でも作業中でも、屁が出ればともに祝福し合った。それほど下痢が多かつた。

栄養失調者には別に栄養食など与えられはしたものの、不順な気候の異郷にあつて、心身の酷使は、食糧の悪いのと相まって故郷を恋いつつ次々と死んでいった。私の不寝番の折も一人「お母さん」と呼びつつ息を引きとられたが、思い出すだけに身につまされてならない。死者には、襦袢、袴

下もくれず、かちかちになった遺体は素裸のまま、こもを着せただけで、そりで墓地に送られた。戦友の冥福を祈りつつも皆、自分の番がいつ来るのかと恐れた。半ばあきらめに似たものを持ちながらも、一度故郷の山が見たい、おはぎ、ぼたもちが食べたいと念じた。土地土地の名物の作り方など教え合ったりした。

こんな生活の中で我々に「生きる喜び」「希望」を与えてくれたのは、同好者によって作ってくれた演奏会であった。満州の放送局の専属であったというマンドリン奏者を中心にギター、アコーディオン、太鼓は干しバレイシヨの空きだる、鉄片を集めて作ったシロホンといったあり合わせの楽隊であった。楽士は好きとはいえ居残りは許されず、皆と同じに作業に出、夜おそくまで練習されていた。星の輝き始めた収容所の庭で、鉄柵の中にあることも忘れさせてくれる一刻であった。次に月一回の歌会があり、私も寄せてもらった。

もう一つだけ私だけのささやかな楽しみがあった

た。一本の筆と一個の墨、二冊の書道史を辛うじて持ち得ていたことである。一冊は翠軒先生の『新講書道史』、一冊は山形大、小鶴先生の年表式のもの。ただ折に触れて開いて見、飯盒のふたに釘で傷をつけて作った間に合わせのすずりで墨をすって、古新聞（日本新聞とかいった。南海地震の様子をこれで見で、我が家などなくなつたろうと想像していたが、帰ってみると無事）や白樺の皮などに書いて楽しんだ。一本の筆は先が切れてしまい、ついにばらして楊の枝を軸として作り直して何とか間に合わせた。

二十二年四月、帰国の途につきナホトカに集結した。乗船前に図書はじめ書き物一切持ち帰ることを禁じられた。書道史二冊はやむなく破つた。といつても紙は貴重品、煙草の巻紙として皆に分けた。二冊の書道史も本望であつたろうと思う。幸いに筆は今私の筆架に当時をしのぶよすがとなつてぶら下がっている。もちろん使えるような代物ではないが、私にとつては守り本尊であつて

宝である。

過日、遠縁に当たる友人が三十二歳で不慮の死に遭った。農林技官、営林署担当区主任としてこれから一働きしてもらいたいとき、高さ三メートルくらいのところでのモーター事故であつた。まことに不運という外ない、あつけないものであつた。人の命は、雑草のそのようにその根強さに驚かされることもあり、そのもろさに世のはかなさを痛感することもある。

「よく生きて帰つたこと」と生来蒲柳の質の自分が「今生きている」ことを不思議に思うことがある。「人間万事塞翁馬」とはいえ、とにかく生きられるだけは生きねばと思う。

「人生は短く芸術は長し」とか、芸術として永く残るものができるかどうか分からないけれども、希望を捨てずに努めていきたい。

回顧して感あり

水様便が軟便となりてよろこびし

俘虜の一日も希望はありき

防寒帽の口のあたりは吐く息に

玉をつらねしごとく氷りぬ

湯を出れば使ひしタオルたちまちに

凍てかたまりて棒としなりぬ

外に置きしバケツの凍てて兵の手の

触るるすなはち吸いつけにけり

銃身はほこり吹かむと唇あつる

兵の唇に吸ひつく凍ててあれば

足踏みは止むるべからずとどまれば

凍傷となる朝々の点呼

北斗七星親しきかもよ満州の

空にシベリアの空に仰ぎし

冬去れば川も湖沼もことごとく

街道ぞこれ櫛の走れる

亡き数に入る戦友も多くなりて

五年を三年にちぢめ寄り合う

傷つくはいつも青春「プラトーン」

の映画にわが兵役重なる

腐りたる大豆ぞと夕餉の納豆を

惜しみつつ捨つ初年兵われら

俘虜われら鐵路作りに明けくれぬ

道具といへばもっこつるはし

かがなべて一すじ鐵路は伸びゆけり

故国へ通ずる路ならなくに

幾料の炭坑への鐵路を築きあげぬ

故国への思慕が支へととなりて

地下千丈足裏しんしんと冷えくれば

ひとしほ恋ほし南の故国

牛の糞かき集め炊く飯盒の

汁は実乏しシベリアの曠野に

大揺れの引揚船に酔はざりき

船酔いの止む自信とはなる

シベリアの極寒に耐へしわれにして

霜焼の足ひと冬なやむ

収容所に紛れ入り来し山羊一頭

炊事係のひそかに料る

飯盒に豊かに盛らるる肉食を

俘虜われら食ふは久しぶりのこと

噛みしめて味はふいとまなかりけり

盗み食ふわれらひた箸運ぶ

骨などはペチカに燃やす証拠

いんめつ罪にはあれどせむ術のなく

食事終る間髪にして将校の

見廻りのありてきもを冷やせり